

特集  
まえがき

## 心理学から考える ジェンダー平等と平和

伊田勝憲

ジェンダー (gender) とは、生物学的な性 (sex) に対して、社会的・文化的に作られた性を指す。ゆえに、ジェンダーギャップは、様々な社会制度やバイアス等の累積による格差であり、ガルトウング (J. Galtung) の平和学における構造的暴力 (社会構造による間接的な暴力。松並論文及び田口論文も参照) とも関連が深い。本特集は、直接的暴力と構造的暴力のない真の平和とジェンダー平等の実現に向けて、心理学 (心理科学) がいかにアプローチできるかを考える試みである。

心理学と言うと、一般には「個人」の性格・能力や行動等に焦点化された学問としてイメージされるのかもしれないが、実際には、発達心理学や学習心理学など多くの分野において、歴史、文化、そして他者との関係性を含む集団及び社会の視点から、個人にのみ還元できないものとして能力や行動等を見ることも大切にしている研究者が少なくない。

私自身も所属している心理科学研究会 (略称「心科研」、英語名称 “The Japanese Research Association of Psychological Science”) は、そうした研究者・実践家の集まりと言える。心科研は1969年に設立され、全国11の地区、平和心理学部会やジェンダー部会を含む11の研究部会がある。活動方針に「研究条件の改善と学会などの民主化」「平和と民主主義を守る運動」等を掲げ、保育・教育や心理臨床等の実践家の会員と大学等に所属する研究者の会員がともに集団的研究創造活動に取り組み、「科学性」と「実践性」を追究している。ジェンダー部会の編集により有斐閣か

ら2021年11月に刊行された『女性の生きづらさとジェンダー：「片隅」の言葉と向き合う心理学』は、多方面から好評を得ている。今回、ジェンダー部会担当の運営委員を務める沼田あや子氏のご協力を得て、同書の著者の中から沼田氏を含む5名の書き下ろし論文による本特集が実現した。

沼田論文では、従軍女性の語りの分析から、ケアと戦争の関係が考察されるとともに、語ることによる変化の可能性に着目されている。青野論文では、市民運動と政治の両方の世界に生きた女性のライフヒストリーの分析から、分断を超える視点が導かれている。松並論文では、親密な関係における暴力と戦争とのつながりを視野に、暴力予防教育プログラムから平和教育に迫る。鈴木論文では、暴力がある家族のもとで育った女子少年が、矯正教育を通して生きづらさを言葉にして表現する中で生き方が変容する過程を描いている。そして田口論文では、女子大学生の葛藤から「隠れたカリキュラム」を含む学校教育の不平等と家庭・社会の関係に迫り、学校教育の課題を浮き彫りにしている。

今回は男性の生きづらさを直接的には取り上げていないが、女性の生きづらさの背景にある構造的暴力の分析をはじめ、各論文の記述の中にジェンダーを問わず共有可能な視点を見出すことができるように思われる。本特集がジェンダー平等と平和の実現に向けて連帯を広げることに寄与できれば幸いである。

(いだ・かつのり：立命館大学、  
教育心理学・臨床教育学)